ISSN 1884-7722

ちひろ美術館・東京
美術館だより

No.185
2014.4.21

ちひろ没後40年　ちひろになれる！7つの法則　－技法徹底解剖－

●2014年5月21日(水)～8月3日(日)　後援：絵本学会、こどもの本WAVE、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、(社)日本図書館協会、(一社)東京都小学校PTA協議会、杉並区教員委員会、中野区、西東京市教育委員会、練馬区、武蔵野市教育委員会

いきいきとした子どもたちの姿を、やわらかな色彩で描き続けた画家・いわさきちひろ。一見なにげなく描かれているようにも見えるその絵の背後には、さまざまな技法や工夫が隠されています。

本展では、ちひろの代表的な技法を、７つの視点から徹底解剖します。

その１－水の使い方

ちひろは透明水彩を駆使して、やわらかで清澄な、独特の色調を生み出しました。「しゃぼん玉をふく少女」（図１）では、鮮やかな朱色を中心に黄色やオレンジ、水色、紫といった水彩の淡い色調が広がっています。太陽の光を映して虹色に輝くしゃぼん玉のイメージとも重なり、色が複雑ににじみあう幻想的な画面からは、少女の楽しげな心情が感じられます。

水に溶ける絵の具の特性を生かし、筆に含ませる水の量を巧みにコントロールすることで、ちひろはさまざまな描法を使い分けています。後期の水彩作品の大きな特徴ともいえる「にじみ」や「白抜き」（図２）「渇筆」など、代表的な水彩技法を紹介します。

その２－構図の工夫

草花の向こうにのぞき見たり、ものの尺度を変えてしまったりと、ちひろは構図にもさまざまな工夫を凝らしています。「ねぎぼうずと麦と子どもたち」（図４）のように、手前に草花などを大きく配し、遠景から子どもがのぞく構図は、ちひろが好んで用いたもので、1960年代の作品を中心に数多くみられます。花と子どもの実際の大きさの関係にとらわれない、巨大な花や装飾的な配置など、その大胆な構図（図３）からはちひろの自由で柔軟な発想がうかがえます。

その３－色の工夫

絵を描くうえで配色も大切なポイントです。黄色と紫、青と橙、緑と赤のように互いの色を引き立てあう２色の関係を補色といいますが、ちひろの絵の配色に着目すると、この補色を効果的に用いていることがわかります。「藤の花と子ども」(図３）では、子どもの服や長靴にほどこされた黄色が、藤の花の紫をひときわ際立たせ、印象深いものにしています。

その４－線のテクニック

「２Bから４Bぐらいの鉛筆で描くとちょうどいいんです。銀色というか、鉛筆の一番きれいな色で」と語るちひろの鉛筆画は、流麗な線の美しさにその最大の魅力があります。「横顔の少女」（図５）を見ると、横顔の額からあごにかけての輪郭線は、鉛筆を立てたシャープな線で、一方髪の毛は、鉛筆を寝かせた太くやわらかなタッチで描かれています。鉛筆を動かす速度や角度、筆圧の強弱を変えることで、多彩な表情を生み出しています。

その５－“引き算”で描く

ちひろは1970年頃より世阿弥の能芸論書『風姿花伝』を愛読し、「秘すれば花なり」という部分に共感します。抑えた表現のほうがより深い感銘を与える意ととらえ、この時期「説明的な描写を避け」「引き算のつもりで、一番大事なもののみに集中する」ことを意識して制作に臨みました。絵本『となりにきたこ』では、習作（図７）に描かれた庭の草花やフェンスが、完成場面（図８）では省略されています。描きすぎず見る人の創造力にゆだねる「引き算」の表現に注目します。

その６－かわいさのひみつ

やわらかな髪や肌、つぶらな瞳、子どもが見せる愛らしい仕草や表情を、ちひろは母親の愛情に満ちたまなざしで画面に描きとめました(図６)。瞳とあごを結ぶ顔のバランス、手や指の仕草など、かわいいと感じる法則を探ります。

その７－形をとらえるデッサン力

後年ちひろは、どんな格好もモデルなしで描けると語り、下描きも輪郭線もなしに水彩の濃淡だけで形を表現することもありました。14歳で岡田三郎助にデッサンの基礎を学び、画家を目指した20代には丸木位里・俊夫妻の早朝デッサン会に通う傍ら、外でもスケッチブックを手に、市井の人々の姿を瞬時に描きとめました。息子の誕生後には子育てのなかでスケッチ（図９）を重ねています。鍛え上げたデッサン力を礎にして、多彩な水彩技法と子どもを慈しむ心が、ちひろの個性を開花させたのです。　（山田実穂）

ちひろ美術館コレクション　びっくり！絵本水族館

●2014年5月21日(水)～8月3日(日)　協力：(公財）東京動物園協会　葛西臨海水族園、井の頭自然文化園

現在、ちひろ美術館では、世界33の国と地域の203名の画家による約17300点の作品を収蔵しています。本展では、収蔵作品のなかから世界各国の絵本画家が描いた個性豊かな水の生き物の数々を展示します。ちひろ美術館・東京の展示室が、水族館に大変身。絵本ならではの驚きに満ちた水族館にご案内します。

これも魚？

長新太の『びっくり水族館』の原画は全長約３mにもおよびます。日本国内の水族館を余すところなく訪ね歩いたという長ならではの水族館の楽しさを満載した作品。「ダメタコ」など絵本ならではの生き物が見られます。（図１）

ユゼフ・ヴィルコンが画面いっぱいに描いた深海魚は迫力満点です。周囲に描かれたかわいらしい魚が、鋭い歯を持つ巨大な魚を強調しています。（図２）ヴィルコンの海の生き物に対する独自の観察眼は、ブリキでつくったエイやフグなどのオブジェにも生かされています。

ピエト・フロブラーは、フランスの作曲家カミーユ・サン＝サーンスが作曲した組曲「動物の謝肉祭」を描いています。第７曲「水族館」を描いた作品では、フルートを奏でる魚が軽妙に描かれ、曲のイメージと響きあいます。（図３）

エンリケ・マルチネス・ブランコは奇想天外な空想上の小動物を「ビチート」と名付けて創作しています。猫のような毛皮に覆われた人のような顔を持つ魚は、今にも喋りだしそうです。（図４）

その他、エビや貝、哺乳類のシロクマ、ラッコ、クジラ、爬虫類のワニ（図５）、両生類のカエルもご覧いただけます。いずれも個性派が揃っています。

物語のなかの水の生き物

古来より日本の文学や美術で親しまれてきた妖怪のカッパ。当絵本水族館でもどこか滑稽味のある軽やかな身のこなしで人気を博しています。

また、中国を起源として朝鮮半島や日本にも伝わる竜は、水をつかさどり信仰の対象とされてきました。韓国、中国、台湾の竜が揃ってお目見えします。

最後は魅力あふれる人魚たちがみなさまをお見送りします。（図６）（原島恵）

図1　しゃぼん玉をふく少女1969年

図2　野菊と少女　1969年

図3　藤の花と子ども　1970年

図4　ねぎぼうずと麦と子どもたち　1960年代半ば

図5　横顔の少女　1971年頃

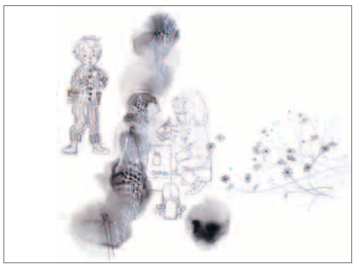

図7

図6　耳に手をやるあかちゃん　1971年

図8　外で朝ごはんを食べるふたり『となりにきたこ』（至光社）より　1970年　＊図7はその習作

図9　息子猛3態　1951年

ちひろの絵について学べる技法体験や実験コーナーも予定しています。

●展示室2

図1　長新太（日本）『絵巻えほん　びっくり水族館』より（部分）（こぐま社）1990年頃

図5　エリック・カール（アメリカ）『頭のてっぺんからつまさきまで』（習作）1996年

図2　ユゼフ・ヴィルコン（ポーランド）深海魚　1994年

図3　ピエト・フロブラー（南アフリカ）『動物の謝肉祭』より　1998年

図4　エンリケ・マルチネス・ブランコ（キューバ）ビチート9　1990年

図6　フィオナ・ムーディ（南アフリカ）『ある漁師のおとぎばなし』より　1984年

2014年3月29日（土）クヴィエタ・パツォウスカー展関連イベント

子どもワークショップ「紙の町をつくろう」

クヴィエタ・パツォウスカーの絵本『紙の町のおはなし』には、次のようなことばがあります。「紙っておもしろい。折ったり切ったりねじったりできるし、はったり重ねたりもできる。そんなわけで、紙の町はとってもわくわくする町なのです」。小学生のみなさんと、そんな“紙の町”をつくりました。

まずはパツォウスカーの作品でもよく使われている技を試してみました。白い紙を半分に折ると、紙は立つようになります。さらに折っていくと四角い建物ができ、そこにはさみを入れると窓が開きます。はさみの入れ方、折り方でいろいろな形ができてきて……。初めは恐る恐る試していた子どもたちも次第に大胆になっていきました。リボンやカーテンのついたカラフルな家や、動物の顔のついた家、１cm位の小さい家、空飛ぶ絨毯付きの家など、みんなの家を集めたらにぎやかな街ができました。クマやゾウ、かわいい女の子や摩訶不思議な動物も、町の住人として登場しましたよ。紙ってこんなに自由で楽しい素材だったのか！と改めて感じた１日でした。（上島史子）

4月6日（日）ちひろ没後40年記念

松本由理子講演会「ちひろが願ったこと」

松本由理子（公益財団法人いわさきちひろ記念事業団評議員）の講演会の一部を以下にご紹介します。（原島恵）

●いわさきちひろとの出会い

ちひろの一人息子の松本猛さんは、大学でベトナム反戦運動に参加する仲間でした。1973年の夏、大学の図書館にいた私の前に猛さんが来て、「僕んちクーラーあるけど、遊びに来ない？」って誘われたんです。個人宅にクーラーがあるのが珍しい時代。アトリエに入ると、女学生のような清楚なイメージの小柄な女性が、絵筆を持つ手を休めてぱっと私を見た。それが41年前の最初の出会いでした。ふっと画机を見ると、当時、私が一番関心を持っていたベトナム戦争の記事や写真が置いてありました。驚いていると、ちひろは奥の和室に案内してくれました。部屋一面に並んでいたのが、『戦火のなかの子どもたち』の原画でした。その絵は、私の心を鷲掴みにしました。この物静かな女性がどうしてこういう表現ができるのだろう、どんな人生を歩んできたのだろう、それを知りたいと思いました。それが、今まで私が38年以上にわたりこの美術館に関ってきた最大の理由です。

●ちひろ美術館の誕生

私と猛さんはちひろの病室で結婚式を挙げました。２か月後の告別式の朝、夫の善明さんは、私たち二人を呼んで言いました。「私はちひろの描いたものを私たち家族だけのものとするのではなく、人々が望むのであれば、ささやかであっても人類の遺産のひとつとして位置付けたいと思う。」ちひろが亡くなった当時、絵本画家の評価は低く、公立の美術館で個展の開催ができませんでした。まずは全国津々浦々のデパートの催事場で、約２年間に72回ほど展覧会を開催しました。訪れた方々から「落ち着いてちひろの絵に逢える場所をつくってほしい」という要望がたくさん寄せられました。

本当に何もわからないところから手さぐりで美術館の設立に動き出しました。

私たちが本当に誇れるのは、ちひろの絵と生き方に共感して、多くの方が力を貸してくれたこと。ちひろが好きで本やカレンダーを買い、カンパをしてくださる方のおかげで美術館は建ちました。この美術館が37年間も存続し、東京と安曇野を合わせて今までに588万人もの方が訪れくださったことは奇跡のようです。

開館して３年目と４年目に、平和を語りかける展覧会を開催しました。展覧会に寄せて、当時の館長・飯沢匡は次のように記しています。「ちひろの絵を見て感動なさった方は、ひとたび戦禍が襲ってきたら、このような美しい世界、やさしい空気は瞬間に消え去って、あとには何も残らないことを、よく想像して頂きたい。- 中略 - ちひろの芸術が高く評価されるのはその想像力にあるといえよう。想像は徹底した合理的な現実直視から生まれるものである。それがない想像は、人をうたない。」

●人々との出逢い

ちひろの生涯を調べるなかで、忘れられない人々との出会いがありました。その一人が、栗原貞子さんです。ちひろは敗戦の前年に「女子義勇隊」の花嫁修業の先生として勃利（中国東北部）に渡り、幸いにも３ヶ月後に帰国できました。栗原さんは、18歳で義勇隊の一員として同地に渡り、中国残留婦人として大変なご苦労をなさった後、1980年に二人の娘さんとともに自費で帰国しました。栗原さんはこうおっしゃいました。「ちひろさんは早く帰れて良かった。私はちひろさんの絵が大好きだ。ちひろさんはあそこで見たことをみんな絵のなかに描いている。ちひろさんの絵を見ると、戦争はしないで、戦争をしたら弱い立場の子どもや女や老人が一番つらい目にあうっていう声が聞こえてくる。」

今、ちひろが生きていたら95歳。生前のちひろを知る人は少なくなりました。10年前にちひろを知る方の証言を動画で記録することを決め、７年で約50人にインタビューをしてもらいました。なかには、戦後間もない頃、子どもだった３姉妹もいます。彼女らは空襲で父親を失いましたが、ちひろから「これからはバレリーナになりたいと思ったらバレリーナになれる、絵の勉強がしたい思えば絵の勉強ができる、そういう世のなかになるのよ。」と言われ、夢と希望が持てたと語っています。

●ちひろの絵の魅力

展示室でちひろの絵を見ている方々からよく聞こえてくるのが「うちの子にそっくり。」という言葉。私にも３人の孫ができ、そっくりだなと思います。ちひろは絵のなかに、観る人の想像力を膨らませる余白を残しているんですね。誰もが、描かれていない部分に自分にとって大切な子どものイメージを加えて見ることができるのです。

お姉さんとあかちゃん　1971年

私は、この絵が大好きです。ここには、この子たちを愛おしく思う大人のまなざしが感じられます。ちひろはこの小さな命がいとも簡単に消えていった時代を知っていました。このかわいい子どもたちを泣かせないでと、私たち大人に語りかけているように感じます。

●美術館の羅針盤－感想ノート

もし今、ちひろが生きていたらどう考えるだろうかということが、美術館の運営の柱のひとつです。そして、私たちが、何を羅針盤としてきたかというと、開館以来ずっと続けてきた「ひとことふたことみこと」という来館された方に書いていただく感想ノートです。みなさんがどんな気持ちで美術館に来て、何を思ってくださるのかということがよくわかるこのノートを読むことは、私の一番の喜びでもあります。

ひとことふたことみこと

3月9日（日）
昭和55年８月に訪れ、感激して、涙、涙。当時の「ひとことふたことみこと」を、いとこが見つけてくれました。とても嬉しいやら恥ずかしいやら、です。あの時の平和への誓い、生命を守る活動を全然していない、ごめんね。長い年月が経ち、私は今、娘と息子の母、そして保育士として頑張っているよ。ちひろさん、ありがとう、また来ます。　（北海道　工藤栄子）

3月12日（水）
私が物心ついたころから、家の廊下には「チューリップと子ども」の絵が飾ってありました。「ちひろ」というサインを見て、「これは私のことを上手な画家が描いてくれたんだわ」とずっと思っていたことを少し恥ずかしく思うのと同時に、いわさきちひろさんと同じ名前を持てたことをとても嬉しく思っています。18年間の人生で、ちひろさんの原画を見るのは今日が初めてです。なぜだか分かりませんが、涙があふれました。私に「ちひろ」という名前をつけて、ちひろさんに出会わせてくれた両親に、あたたかくやさしい絵をたくさん描いてくださったちひろさんに、ありがとうの気持ちでいっぱいです。（神奈川県　長島千尋）

3月14日（金）
初めての来館ですが、繰り返し訪れる方の気持ちが分かりました。ぼーっと過ごせる場所なのですね。復元アトリエ横のiPadで聴ける、夫の松本善明さんのインタビューがたいへん良かった。サンドイッチが食べたくなります。昔の感想ノートが製本されていて、かつて来館した人のことばを眺めているのも、なんだかふしぎな気分になります。　（もりたたろう）

〔パツォウスカー展のノートより〕

3月22日（土）
紙と色の可能性を最大限に引き出した作品で、面白く感心しました。絵本は読むだけのものではなく、特に子どもが大好きな「触れる」も満たしてくれるものなんだと、あらためて気づかされました。
（おくの）

3月26日（木）
楽しかったです。色の洪水です。よくわからなかったのに目に焼き付いている絵もあります。わかりやすいことがすべてではないんですね。またパツォウスカーさんの絵に会いたいです。　（mitobe）

美術館日記

2月14日（金）
大雪に見舞われた今日、水仙をはじめ、春を待つ美術館の草花も、降りつもる重たい雪の下に。

2月28日（金）
初めてブロガー向け内覧会を開催。ギャラリートークではちひろの平和への思いやパツォウスカー作品の魅力などを、それぞれの展示担当がエピソードを交えながら紹介。館内をゆっくり鑑賞された参加者から、後日ブログやツイッターで楽しい発信をしていただいた。

3月1日（土）
没後40年最初の展示が始まった。アトリエには３つの映像展示が登場。証言映像のコーナーでは、ちひろゆかりの方々の言葉を映像と音声で楽しむことができる。まずは８名の証言でスタート、今後さらに充実する予定。またちひろの制作風景を撮った貴重な連続写真や、ちひろのファッションを紹介するデジタルフォトフレームも。いわさきちひろをもっと知る機会、ぜひ楽しんでいただきたい。

3月2日（日）
絵本カフェにパツォウスカー展にちなんで、チェコの伝統的なお菓子「ターチュ」が登場。ヨーグルトを加えた生地にフルーツを入れた焼き菓子でやさしく素朴な味わい。チェコでは、まさに故郷のお母さんの味とか。

3月7日（金）
杉並区の幼稚園から年長組の子どもたち約60名が来館。この幼稚園では毎年卒園記念に美術館を訪ねてくださる。子どもたちのきらきらした笑顔が展示室にあふれた。

3月8日（土）
「ちひろの庭」が園芸ガイド春号の特集記事に。「庭は画家ちひろのインスピレーションの源」松本猛が母ちひろの庭づくりの思い出や、美術館の「ちひろの庭」を語る。

3月18日（火）
関東地方に春一番が吹いた日。埼玉医科大学総合周産期母子医療センターでピエゾグラフの掛け替えを行う。院内の廊下や待合室にちひろの春の子どもたちがお目見え。

3月30日（日）
ガーデントーク「ちひろの庭の花めぐり」開催。あいにくの雨に、アトリエから庭を見ていただくことに。ちひろが暮らしたころの庭のようすや庭仕事のエピソードなどを紹介。展示室では、花と子どもたちや『戦火のなかの子どもたち』のシクラメンの絵に、ちひろにとって花が命そのものの象徴であったことを、感じていただいた。

窓

私たち一人一人の非戦を貫く意思

竹迫祐子（公財）いわさきちひろ記念事業団事務局長

韓国に絵本美術館をつくろう！と活動をしている絵本作家や市民活動家たちのグループが、この３月、認定NGO団体として本格的な活動を開始しました。発足記念の集いに参加し、絵本美術館の役割について一緒に考えようと、日本の絵本美術館事情やちひろ美術館の理念と活動について話をしました。ソウルの孔徳駅近く、若者たちが集うアートマーケットの一角に設けられたコンテナハウスが団体の拠点。ソウルをはじめ、チェジュ道やグンポ市、スンチョン市など、全国各地で絵本の活動をする人たちが駆けつけ、会場は熱気に溢れています。

昨年、当館で研修をした同NGOの代表ハンさんは30代の女性。今秋にはグループの人たちとともに、再度、同館に視察と交流で来日する予定です。

韓国と日本。現在、竹島の問題や慰安婦問題を抱え、国同士の関係は微妙ですが、絵本を通じての交流は、全く影響ありません。それは、日本が戦後70年つづけてきた非戦の姿勢があればこそのことです。

安倍首相が訴える「戦後レジームからの脱却」。日本の戦後レジームとは、基本的人権、国民主権、平和主義を持つ日本国憲法に基づく政治体制です。なぜ、そこから脱却する必要があるのでしょう。もし、日本の非戦の姿勢が揺らげば、これまで互いの努力と英知で築いてきた世界の国々との豊かな関係もぐらつきます。今、憲法解釈の仕方によって集団的自衛権の行使ができるようにしようとする日本の動きに、諸外国はとても敏感です。

チェジュから遠路届けられたデコポンや韓国風海苔巻きを一緒にほおばりながら、改めて、私たち一人一人の非戦の意思が何より大切なことを実感しました。

INFORMATION

●次回展示予定　2014年8月6日(水)～11月3日(月・祝)

いわさきちひろ×佐藤卓＝展 －はじめて見るちひろの世界－

「ロッテキシリトールガム」「明治おいしい牛乳」などの商品デザインや、教育テレビ「デザインあ」の総合指導などで注目を集めるグラフィックデザイナー・佐藤卓。1997年の安曇野ちひろ美術館開館以来、ちひろ美術館のロゴなどのデザインにも携わっています。佐藤卓のデザインは、ものの本質を見極め、ものに物語を与え、ものと人とを結びつけます。既成の概念にとらわれず、人に新たなものの見方を提示してきた佐藤卓が、いわさきちひろの絵を今の人たち、特に子どもたちに届くようにプロデュースします。

佐藤卓デザイン事務所
ロッテ　キシリトールガム
明治　明治おいしい牛乳
エスビー食品　スパイス＆ハーブシリーズ
大正製薬　ゼナ

ちひろ美術館・東京イベント予定　http://www.chihiro.jp/

各イベントの予約・お問合わせは、ちひろ美術館・東京イベント係へ。イベント参加費のほか、別途入館料が必要です(高校生以下は無料)。
TEL. 03-3995-0612　E-mail chihiro@gol.com

ちひろになれる！７つの法則－技法徹底解剖－関連
●ちひろの水彩技法体験ワークショップ

いわさきちひろの水彩技法を体験する人気のワークショップ。今回は、朝顔の絵を描きます。
○日　時：７月26日（土）・７月27日（日）
　　11：00～12：30／14：00～15：30
○対　象：５歳～大人
○定　員：各回30名　要申し込み　６月26(木)受付開始
○参加費：300円

●わらべうたあそび

声を出して歌ったり、体を動かしたりしながら、親子で楽しく参加できます。
○日　時：７月５日（土）11：00～11：40
○講　師：服部雅子（西東京市もぐらの会代表、はとさん文庫主宰）
○対　象：０～２歳までの乳幼児と保護者
○定　員：15組30名　要申し込み　６月５日(木)受付開始
○参加費：無料

●ガーデントーク　ちひろの庭の花めぐり

「ちひろの庭」や展示室で、ちひろが愛した草花などのエピソードを紹介します。
○日　時：６月８日（日）14：00～14：30
※参加自由、無料

●松本猛ギャラリートーク

母・ちひろとの思い出や展示のみどころなどをお話します。
○日　時：６月15日（日）14：00～
○講　師：松本猛（ちひろ美術館常任顧問・絵本学会会長）
※参加自由、無料

●ファミリーギャラリートーク

ちひろの絵を対話しながら鑑賞します。ご家族でご参加ください。
○日　時：６月14日（土）14：00～
※参加自由、無料

●ギャラリートーク

毎月第１・３土曜日　14：00～
※参加自由、無料

●えほんのじかん

○協　力：NCBN（ねりま子どもと本ネットワーク）
毎月第２・４土曜日　11：00～
※参加自由、無料

●ちひろ美術館×葛西臨海水族園コラボイベント
○出前水族館－へんてこ！海の生き物

へんてこな海の生き物がちひろ美術館にやってきます。葛西臨海水族園の職員が、映像や資料も交えながら海の生き物の生態を解説します。
○日　時：５月25日（日）15：00～16：00
○講　師：葛西臨海水族園職員
○対　象：小学生～大人
○定　員：60名　要申し込み　４月25日(金)受付開始
○参加費：無料

○海の絵本を読もう！
ちひろ美術館による出張読み聞かせ

○日　時：６月15日（日）　○講　師：ちひろ美術館職員
○会　場：葛西臨海水族園　○参加費：無料
※詳細は右記へご連絡ください。TEL.03-3869-5152（代表）

●ちひろ美術館×井の頭自然文化園コラボイベント
○出前水族館－びっくり！淡水の生き物

井の頭自然文化園の職員が、映像や資料も交えながら淡水の生き物の生態を解説します。
○日　時：６月29日（日）15：00～16：00
○講　師：井の頭自然文化園職員
○対　象：小学生～大人
○定　員：60名　要申し込み　５月29日(木)受付開始
○参加費：無料

○水辺の生き物の絵本を読もう！
ちひろ美術館による出張読み聞かせ

○日　時：７月６日（日）　○講　師：ちひろ美術館職員
○会　場：井の頭自然文化園　○参加費：無料
※詳細は右記へご連絡ください。TEL.0422-46-1100（代表）

●山田真講演会「福島について伝えたいこと」

東日本大震災後、福島での医療相談会も行っている医師・山田真が、活動に込める想いや被災地の現状を語ります。
○日　時：６月７日（土）17：00～18：30
○講　師：山田真（子どもたちを放射能から守る全国小児科医ネットワーク代表）
○定　員：60名　要申し込み　５月７日(水)受付開始
○参加費：1200円（入館料込み）

CONTENTS
〈展示紹介〉ちひろになれる!７つの法則－技法徹底解剖－／ちひろ美術館コレクションびっくり!絵本水族館…❷❸
〈活動報告〉没後40年記念　松本由理子講演会「いわさきちひろが願ったこと」／クヴィエタ・パツォウスカー展関連イベント　子どもワークショップ「紙の町をつくろう」…❹
ひとことふたことみこと／美術館日記／窓「今、私たち一人一人の非戦を貫く姿勢を」…❺

美術館だより　No.185　発行2014年4月21日

ちひろ美術館・東京
〒177-0042　東京都練馬区下石神井4-7-2　テレホンガイド03-3995-3001 TEL.03-3995-0612 Fax 03-3995-0680
http://www.chihiro.jp/　E-mail:chihiro@gol.com